

日本史 問題 I

古代の仏教と国家のかかわりに関する次の文章を読んで、以下の問いに答えよ。

百済からの公伝以来、仏教は国家との強い関わりのなかで発展した。公伝当初は、仏教を受容するか否かで激しい論争が起こったが、6世紀末に崇仏派が勝利し、① 7世紀を通じて国家と仏教の関係は強まっていった。その後8世紀半ばには② 聖武天皇の政策によって仏教はさらなる隆盛を迎え、平城京には多くの大寺院が建ち並び、鎮護国家のための法会が盛んに行われた。しかし、こうした仏教政策のなかで、政治に介入する僧侶もあらわれた。

8世紀末に遷都した桓武天皇は、新都への奈良の大寺院の移転を認めず、新たな鎮護国家仏教を求めて僧侶を唐に派遣した。こうした期待に応えたのが、まず最澄であり、天台宗をもたらした。また、やや遅れて空海が真言宗をもたらしたが、真言宗は密教であり、鎮護国家の役割に加えて加持祈禱による現世利益も説いたため、皇族や貴族から信奉を受けた。そうしたことから、天台宗も後に密教化し、勢力を拡大していった。こうして③ 平安時代には密教が隆盛し、奈良の大寺院の多くは衰退したが、その中心寺院である東大寺と摂関家の氏寺となった興福寺は、多くの荘園寄進を受けるなどして勢力を拡大した。

④ 院政期には、国家権力と仏教の結びつきはより強固となり、王法仏法思想の高まりのなかで、寺院は国家に奉仕するみかえりに保護されることを求めた。延暦寺や興福寺などの大寺院は多くの僧兵を抱えて軍事力を高め、⑤ 自分たちの要求を通すため、朝廷や院への強訴を繰り返した。

問1 下線部①について、7世紀初頭ころと7世紀後半の仏教のあり方の相違点について、建立された寺院の性格の違いを明らかにしながら説明せよ。

問2 下線部②の一つに以下の史料に見える大仏造立政策が挙げられるが、聖武天皇はなぜこのような詔を出したのか、鎮護国家の意味を考えながら下線部にこめられた意図に注目して説明せよ。

……菩薩の大願を發して盧舍那仏の金銅像一軀を造り奉る。……夫れ天下の富を有つ者は朕なり。天下の勢を有つ者も朕なり。此の富勢を以てこの尊像を造る。事や成り易き、心や至り難き。……もし更に、人情^{こころ}に一枝の草、一把の土を持ちて像を助け造らむと願ふ者有らば、恣^{ゆる}に聽せ。……

(『続日本紀』。文章は一部省略し、書き改めた。)

問3 下線部③に関連して、密教の文化的影響に関する次の文章の空欄 ～ にあてはまる語句を記入せよ。

密教の隆盛は文化にも様々な影響を与えた。密教は山林修行を重視したため、山中の地形に応じて伽藍を配置する山岳寺院建築が盛んになった。平安初期の寺院建築の様子を伝える遺構は数少ないが、後に女人高野と称された 寺の金堂などが知られる。また、密教と在来の山岳信仰とが結びついて、吉野の大峰山などでは が発達した。絵画では密教の宇宙観を構図化した が描かれ、彫刻では密教に関わりの深い仏像が、 造の技法で作成された。この時代の彫刻の傑作として、観心寺 像がある。

問4 下線部④に関連して、この時期の上皇と仏教の関わりについて、以下の語句を使用して説明せよ。

法皇 六勝寺 高野詣 成功

問5 下線部⑤に関連して、「自分たちの要求」の背景にはおもに2種類の紛争があると考えられる。その2種類の紛争とは何か、簡潔に述べよ。